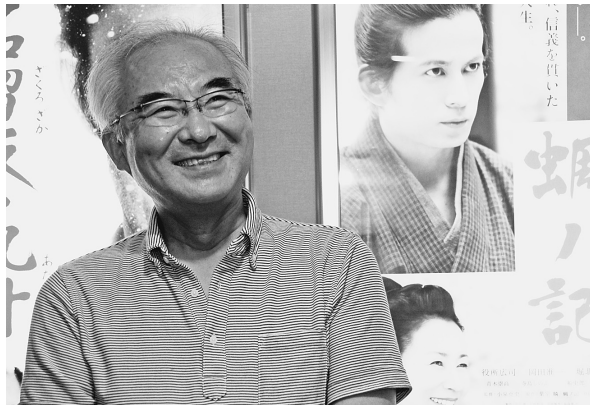


映画ファンと共に30周年

フォーラムネットワーク代表
長澤 裕二さん



40年ほど前になる。山形大学工学部機械学科を卒業し、私が進んだ道はメーカーでも研究所でもなく、全く畑違いの洋画封切り館「東北劇場」(仙台市)であった。映画は斜陽の真ただ中、ましてや営業見習いとしての就職。親からは勘当を言い渡された。それでも「映画ファンのための映画館をつくりたい」という思いと、「人生は辛いが生きる値打ちはある。それには3つのことが必要だ。勇気と希望とサムナー」(チャップリンの名作「ライムライト」)ではないが、思い立ったら行動するという性格。何より若さだったのだろう。

入社して半年、福島県原町の映画館への転勤を命じられた。行けばボルノ専門館。スクリーンは破れ、椅子からはスプリングが飛び出て半数以上は使用不能。映写機も不具合な代物。トイレの匂いが客席まで…。斜陽産業そのものを象徴する有様だった。当然ながら閑古鳥が鳴く状態。しかし、私にとってはまさに格好の修業の場となった。独立採算性の了解を得て、小屋のイメージを変えるため取り組んだのが大作「砂の器」の上映。前売り券を売り歩いて得た収入で椅子を替え、スクリー

ンを張替え、映写機を購入、並行して映画サークルを立ち上げて名画を上映した結果、何とか収益を挙げる事ができた。ところが、赤字を脱却した途端買い手が現れ小屋は売却された。私の修業は終止符を打ち失業の身となった。

しかし、そこで得たものは大きく、「地域の人たちに信頼される場となれば、映画館はやって行ける」という自信につながった。しかも予定外の出会いがあった。映画を自らの手で配給・上映して行こうとする全国規模の団体全国映画センターを知ったことである。失業を機に山形に戻り「山形映画センター」を設立し、フィルムと映写機を車に詰め込み県内各地で上映会を開いた。センターの友の会として「山形えいあいれん」が結成された。年会費3千円の会員制で、ビルの狭いフロアの壁にスクリーンを張り、床にカーペット敷き毎月1回16mmフィルム上映した。運営は会員で分担し「みんなで上映し、みんなで観る」という集団「フォーラム」となり、1984年7月25日、山形市大手町の住宅街の一角に2スクリーンを備えたフォーラムⅠ、Ⅱ館を開館することができた。最初の上映は「ひまわり」と「未知との遭遇」。アート系の名作を封切り人気作品と一緒に上映することで資金的余裕を生み出し、さまざまなファンの希望に応えるという独自のシステムが実現した。「おしゃれで綺麗で天井が高く、ゆったりとした椅子に座り、前の人の頭を気にせずに、好きな映画を手軽な料金で観たい」というファンや市民の希望と私たちの夢がひとつになった。

今年7月で30周年を迎えた。山形市からスタートし福島、盛岡、仙台、八戸、那須塩原、東根でフォーラムを開館している。30年の間にはシネコンの台頭など幾度となく決断を迫られる場面に遭遇した。とりわけ現在、イオンシネマ天童ができて県内の総スクリーンは56となった。この数字は人口1人当たりでみると全国トップ。一見映画の都と言えそうだが集客可能な観客数そのものが限られており、満席感のなさが映画館から熱気を奪いかねない状況となっている。

さてどうするか。私をこの世界に突き動かしたのは山大時代に出会った黒澤明監督の名作「生きる」。名優志村喬演じる退職間際の役所の課長が死を宣告され、残されたわずかな時間を街の人のために生きようする姿に感動した。できない理由を数えればきりが無い。30周年を機に「映画ファンのための映画館をつくる」の原点を再確認し、一緒に歩んできた仲間、若いスタッフ、映画を愛する人たちと共に進む決意です。